

# 人生ハンド仏句

第39号

H. 17. 6. 1  
(毎月1日発行)

## ごき師匠(父)を偲んで

住職 谷川寛俊

京都大本山妙顕寺第六十二世加歴、真成寺第三十四世院首、顕心院日龍上人には、去る五月十六日、午後七時四十七分自ら読経、唱題の内に安祥として大聖人のお膝元へ旅立たれました。

ここに生前中賜りました多くの皆様方の御温情に対し深く感謝し御礼を申し上げます。

例えば三月末に急性腎不全で入院し、二、三日後には、それまでであった全身の痛みも嘘のように取れ、亡くなる数日前には、いつ退院しても良いとまで言われていましたが、容態が急変し、急性呼吸不全で亡くなられた訳であります。

入院初日から先生、看護師さん、周りの病室の人達に向かって合掌し、又ベツトの中で法華経とお題目を唱え、病院内にお題目の種を蒔かれ(下種結縁)おそらくこのお題目を耳にされた人達は、知らず知らずの内にお題目の功德によって仏の心が芽生えて来るものと信じま

す。

亡くなられた十六日夜は、かつて四十五年程前、真成寺に入寺して間もなく「信行会」を結成した記念すべき日で、この夜も数人の人達が集まって始まるうとしていた時、先に病院で待機していた家内と娘より、「急いできて欲しい」との電話があり副住職と駆けつけた時は、すでにお医者様の心臓マッサージが続いており、医療チームの懸命なる処置の甲斐も無く無常にも死亡の確認を耳にし、やがて八時過ぎに御遺体に戻り、そして信行会のメンバーの皆様方に見守られる中、私と副住職と家内で法衣に着替えさせ、さぞ本人も満足であったろうと想像致しております。

例えば昨年八月二十七日に母親を亡くし十一月には家内の父親を亡くし、一年以内に三人の親を亡くした私達家族は深い悲しみです。私達は、此の世に使命を受けて生まれさせていただき、それぞれの役目を終えて再び元の世界へ返って行くのです。今頃は靈山浄土で懐かしい思い出話に花が咲いていることでしょう。

日蓮大聖人様の有名なお言葉に「まず臨終のことを習うて後に他事を習うべし」我々は、必ず死を迎えます。そのことは誰でも承知しています。若い人は急なことで

編集・発行  
玉蓮山 真成寺  
編集部  
TEL・FAX (0765)22-2268  
メールアドレス  
kokorochanthk@ybb.ne.jp  
ホームページアドレス  
<http://www.geocities.jp/sinjoyujitoyama108/>

はないと思ひ、年をとった人はそろそろ近づいたと思うかもしれない。しかし死に支度をしている人は、ほとんどいません。どういうことをして良いかも分からないし、第一、自分の死ぬことをまともに考えるのは嫌なものです。聡明な人間の一番の弱点はここにあるのです。まず人間は、必ず死ぬんだ、だから臨終の時のことを考えて毎日毎日を悔いのない様にしっかりと暮らさなければいけないのだと自戒する必要があります。それにはお題目の信仰を中心とした生活を営まなければいけないのです。そして何よりも死後のあり方は、生前のあり方によって定まるものです。即ち「善因善果」「悪業悪果」がそれでありま

す。師匠は真言宗の深い信仰家の四男として生を受け、縁あって釈尊一代の説法の中で、唯一絶対諸経中の経王と言われる法華経、その法華経に身命を賭けて広められた日蓮大聖人様の門下に連なり、本人が常日頃から言っていました、「死ぬのは怖くない、お迎えが来たら安心して大聖人様のお膝元に行けるから」と泰然自若の姿勢と確固たる信仰を見習わなければと痛感致

しております。

お題目流布の為、宗門内外並びに社会教育、青少年教育に全身全霊を尽くされた九十六年の生涯は、誠に偉大でありました。その功績が本葬儀に於けるあの大きな本堂を埋め尽くし境内も各界からの焼香の列が続き威徳が偲ばれました。

ここに改めて感謝し心からの御礼を申し上げる次第で御座います。本来ならば日を改めて本葬儀を取り行わなければいけないところですが、本人の希望でも御座いましたので通夜に引き続き葬儀を執り行わせていただきました。

全国の御寺院様並びに檀信徒の皆様方には、さぞ驚かれたでしょうが、何卒ご了承下さいませ。

尚、母の時もそうでしたが、昼夜を分かたぬ献身的な看護をしてくれた家内と娘に心から合掌を申し上げたいと思います。

どうぞ今後共、残された寺族に対しまして、ご指導、ご鞭撻を賜ります様、重ねてお願い申し上げます。

